

会議録（要点筆記）

会 議 名	平成 29 年度 第 2 回米原市環境審議会
開 催 日 時	平成 29 年 11 月 2 日（木） 午後 3 時 00 分～午後 4 時 50 分
開 催 場 所	米原市役所山東庁舎 会議室 2 A B
出席者および 欠席者	出席者：伊夫伎博夫委員、卯田隆委員、柏英樹委員、門脇政光委員、嶋野美 知子委員、高森茂美委員、仁連孝昭委員（会長）、藤田知丈委員、松 下京平委員、八上弥一郎委員 事務局：山田経済環境部長（途中退席） 木村課長、松居課長補佐、鎌田主任、川村主事（環境保全課） 傍聴者：0 人 欠席者：伊藤和典委員、須藤明子委員（副会長）、谷口絹代委員、室谷菊司委 員
議 題	第 2 次米原市環境基本計画（素案）【前半】について
結 論 （決定した方 針、残された 問題点、保留 事項等を記載 する。）	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 第 1 章「目的と位置づけ」について、市民の自発性を尊重した表現にすること、対象に来訪者を追加することとされた。 ➤ 第 2 章「計画改定の背景」について、少子高齢化の現状など10年間の社会変化と主な環境課題をまとめるセクションを追加することとされた。 ➤ 第 3 章 3 節「重点プロジェクト」の考え方について、「3つの視点」は取り入れないこととし、人口減少社会であることを考慮し、広い視野から取組を検討、整理しなおすこととされた。 ➤ 第 4 章以降について、SDGsやスローシティの考え方を活用し、環境保全の取組が市民に分かりやすく伝わるようにすることとされた。 ➤ 第 4 章第 1 節の「分野 I. 「ひと」」について、重要な課題であり、人口減少に関する分析や対策の提案をすることとされた。 ➤ 第 4 章第 2 節「自然環境」、第 3 節「自然との共生」について、野生動物の増加等による森林の多面的機能の減少が環境・経済・社会の大きな課題となっていることから、個体数調整やその他の課題解決の方策を検討することとされた。 ➤ 第 5 章「推進体制」について、計画づくりの段階で市民参加の機会を多くし、全体目標の実現に向けて議論や参加を促しつつ進めることとされた。
経済環境部長	1 開会 (開会あいさつ)
事務局	2 議事 第 2 次米原市環境基本計画（素案）【前半】について説明（資料 2）。

委員	<p>米原市全域を見ている中で、山間部集落の高齢化が進んでいるが、今までには集落内の共同作業など、ボランティア活動で環境維持されていたのが非常に大きな力であった。65歳以上の人口比率が30%を超えている姉川上流域の集落では、今後さらに高齢化が進む中で、従来やってきたようなボランティアの環境保全活動がどれだけ維持できるのか、この計画では見えてこない。行政が手をつけられることは非常に少ないと思うが、何らかの対策のヒントのようなものを盛り込めれば、10年間の計画として1つ筋が通る気がします。</p>
事務局	<p>山間部では人口そのものが減少しており、今まで米原市の強みであった自治会単位でボランティアで動くというかたちに限界も出てきている。現在の取組としては、たとえば自伐型林業の担い手として、まちから森林に興味を持っている方に移り住んでいただく取組を、藤田委員が関わって、林務課との協働事業で始められている。人口減少社会の中で地縁団体が担えない部分は、こうした選択肢が広がっていくようにできればと考えている。</p>
会長	<p>伊夫伎委員の提案は、分野「ひと」の部分に人口減少に関する分析や提案を入れてはどうかということですね。</p>
委員	<p>自伐型林業の取組やボランティアを呼び込む取組などすでに実施されているものもあるが、何か計画の中に入れていただければと思う。</p>
委員	<p>市民意識調査の結果について、環境施策に関する満足度は一定のレベルに達しているという説明だったが、これには経済状況等も関係していると思われるので、必ずしも実施した事業が効果として結びついているわけではなく、決して安心はできないと思う。特に第1次計画の重点事項の中で「人」の関係の目標達成率がやや不満足なので、その点を重視した表現をどこかに入れた方がよい。人の参加を明確にしてもらうことが必要と思う。</p>
委員	<p>第2章の第1節「地球環境および地域環境の変化」について、上位計画の紹介だけで終わっている。上位計画について書くセクションと、地球環境、地域環境がこの10年でどう変わったかを書くセクションに分ければ、少子高齢化なども触れることになるので、まとめを入れてはどうか。また、琵琶湖再生法と琵琶湖保全再生計画が策定されたことも触れておいた方がよい。</p> <p>市民、事業者等、行政の3者が協力すると何箇所かで書かれているので、計画づくりの段階で、市民や事業者がどう関わるのか、意見を取り入れるような形にしていきたい。</p>

<p>会長</p>	<p>第2章の「計画改定の背景」の部分で米原市の環境が今どうなっているのか全く触れられていない。米原市の環境の今どこが問題で、どういうところが大事なのかという記述がやはり必要ではないか。たとえば、山が荒れていることを取り上げると、山の手入れはどこまでできていて、どこまでできていないのか、できていないことは今後どうすればよいのか。あるいはビワマスを遡上させる取組はどこまでできているのか、貴重植物がどれだけ獣害にあっているかなど、具体的な米原市の環境の課題についての記述が欠けているので、イメージできるようにする必要がある。</p>
<p>事務局</p>	<p>具体的な個別の課題については、後半の第4章において、「課題・理想・今実施している取組・今後実施すべき取組」を記載することになっているが、前半でも、藤田委員が言われたところと合わせて、分かり易く記載をしたい。</p>
<p>委員</p>	<p>本日欠席の委員の意見として、あまり伊吹山にフォーカスされていないのでフォーカスしてほしい、貴重な自然があるので、よろしくお願ひしたいということでした。</p> <p>重点プロジェクトの視点として「住み続けてもらうための取組」とあるが、住み続けようと思えば、環境も大切だが経済面も大切だ。私の家の棚田でも米も大豆も獣害で全滅して、経済的にやっていけないという環境になっている。獣害のために農業をやめた人も多いように感じる。個人の農家で対処できる範囲を超えている。年々ひどくなっており、自伐型林業など取り組まれているが、焼け石に水の状態である。そういう観点から、環境と経済は一体という視点を入れていただきたい。</p>
<p>委員</p>	<p>山は10年前と比較しても荒れている。荒れている原因は、以前は熊の皮はぎやイノシシの堀返しであったが、今は圧倒的にシカの食害である。山が荒れているからではなく、シカが爆発的に増えたために山が荒れ、さらに食料が不足して里へ出てきている。かつて農地を荒らすのはイノシシだったが、今は圧倒的にシカである。</p> <p>森林組合の間伐や自伐型林業などの森林整備を進めても、シカが減ることはない。猟友会で毎年駆除されているが、駆除するよりも生まれる方が多いので数は微増が続いている。野生動物の個体数調整というのは重要な環境のポイントになる。全国的に災害も誘発しているなので、林務課と環境保全課で調査し、方策を出していただきたい。</p>

会長	今の駆除頭数はどれくらいか。
事務局	何千頭か何万頭か。
委員	目標を達成しても減らない目標数になっている。
会長	目標が低すぎるのか。
事務局	湖北地域は滋賀県内でも生息数が特に増加しており、目標だけむやみに高くしても達成できない。頭数目標などは個別の鳥獣計画で検討される内容になる。環境基本計画においては、山が荒れた現状をふまえた内容にさせていただければと思う。
委員	少しずれるかもしれないが、旧伊吹町ではくくり罠がツキノワグマの保護のために禁止されている。イノシシもシカも賢くなっていて、自分の設置した箱わなではウリ坊しか捕獲できない。くくり罠の方がはるかに効果的だ。クマの保護も大切なことだと思うが、農地の周りに限っては、くくり罠を解除してほしい。環境保全課のテーマではないかもしれないが、クマの保護という環境面と密接に関わっていることなので。
事務局	鳥獣の個別の計画については、専門家も不在の中では議論がしにくいので、林務課の方で、協議をさせていただきたい。
委員	山のことは、環境保全課と林務課と連携させていただきたい。
事務局	たとえばくくり罠については、保護だけでなくクマがかかった場合の危険性の問題もあろうし、箱わなや囲いわなだけでも、市の直営では、伊吹山だけで年間 100 頭のシカを捕獲できている。しっかりした捕獲の技術やノウハウを広げるなど、くくり罠にこだわらない形で、広い視野でお話ができればと思う。
委員	重点プロジェクトのポイントは「米原市らしさの追求と創出」ということだが、重点プロジェクト 1 ではエコツーリズムが推されている理由と、重点プロジェクト 2 の米原らしさのポイントを説明させていただきたい。雪解け水がエネルギーになるというのはどれくらい現実的なのか。雪解け水は木よりは米原らしいと思うが、どうか。

事務局	<p>環境と経済と社会の好循環を考えた時に、米原市の環境の強みは、琵琶湖や伊吹山という自然の豊かさであろうと考えている。自然の豊かさを知っていただくことで初めてその自然を守ろうという人が増えるのではないかという発想で、エコツーリズムに着目している。低炭素はどこの自治体でも取り組んでおり、米原らしさを出すのはなかなか難しい面もあるが、豊かな森林を生かすということと、水力発電の事業者もおられ、現状以上に今後何かできるかは難しいところもあるが、記載をしている。</p>
事務局	<p>市内において、民間事業者が姉川ダムの水力を開始されている。また、上多良地域や吉槻地先で民間事業者が小水力発電を開始されている。行政においては、市は甲津原交流センターに自家消費用のマイクロ水力発電を設置し、今年度から発電を開始しているほか、県営で農業用水を利用した小水力発電で売電をされている。伊吹山から琵琶湖に水がそそぐということで、米原市は水資源に恵まれており、ペットボトル飲料の「まいばらの水」の取組などもしているが、水に着目しての環境に関する取組ということから、低炭素につなげて、経済循環、経済循環を通じての地域の活性化につなげていければと考えている。木質バイオマスについては、民間事業者が全量売電されており、それを少しでも地域活性化に生かせるような小さな発電ができないかということで、米原市再生可能エネルギー推進協議会という組織を設置しているが、そこで検討もいただいているということもあり、バイオマスと小水力発電の2つにスポットを当てて、こちらの表現になっている。</p>
委員	<p>了解した。セールスポイントして発信していければよいと思う。</p>
委員	<p>計画を実現していくには一番何が大切なのか。従来は、上からの施策を下ろしていく感じがしたが、市民の参加の機会を増やすということも含めて、広く意見を聞きながら進めるという柔軟さが必要だろうと思うので、全体の目標はきちんと作るとして、議論や参加を促しながら進めるように、プロジェクトの進め方に期待したい。</p>
会長	<p>第1章「目的と位置づけ」の目的②に「市民全てが共通の認識のもと一体的に取り組むべき方針や環境への配慮事項を示す」とある。「共通の認識」は持つべきだが、「市民全てが一体的に」というのはファシズム的な感じがする。市民にはいろんな方がいるので、それぞれの役割に応じて役割を果たすようにすべきだ。縦割りの行政組織に対しては一体的にという言葉を使うが、市</p>

	<p>民に対して一体的にというのはファシズム的に感じるので、自発性を尊重した書き方にされたい。また、目的③に「計画推進主体となる市民・事業者・行政それぞれが担うべき役割を明確にする」とあるが、伊吹山のように地域外から入って来られる場所も抱えているので、来訪者も対象とし、来訪者に対して米原市の環境保全の考え方が伝わるようにすべきと思う。</p> <p>表紙の表現で、「公園でくつろげる」とあるが、環境基本計画らしく「身近な自然を味わう」等の表現にされたい。また、「交通の便は良く」とあるが、人口が減少する中、公共交通の維持はますます難しくなるだろうから、環境基本計画としてはわざわざ書かなくてよいのではないか。また、「安心野菜」とあるが、地場の野菜、季節の野菜とした方が環境と経済に絡んでよい。</p> <p>また、「びわ湖の素」とあるが、「びわ湖の素」というと、びわ湖を突き詰めていった何かというイメージになると思う。上流が下流を、琵琶湖を支えているというイメージとは違う気がする。「水源の里まいばら」はよいが、「びわ湖の素」は合わないのではないか。どういうイメージか。図柄も味の素のようなイメージだ。</p>
事務局	<p>「びわ湖の素」は、シティセールスプランにおいて、戦略的に米原市のイメージを伝えるためのキャッチフレーズとして作られたもの。意味合いとしては、水源の里まいばらと大きく異なるものではない。</p>
委員	<p>8ページの「計画の構成」の中に、防災の観点が必要ではないか。「安全」という言葉が計画の中で何度か出てきているが、いわゆる自然災害、大雨や台風について、健康でない山であれば里の方で被害が出ることは十分考えられる。森林の機能として、目に見えない潜在的なリスクを緩和しているということを明記した方が、幅広い議論ができるのではないか。減災防災といった言葉は入れておいた方が議論の幅が出ると思う。</p>
会長	<p>防災計画は別にあるのか。</p>
事務局	<p>防災計画はあるが、自然環境の視点ではない。自然環境の基本的な機能、サービスとして、計画に何らか反映したい。</p>
委員	<p>山の自然災害について、近年、山腹崩壊で住宅が土砂災害に遭っている。以前からそういうことはあったが、それは間伐という手入れをせずに木が混みすぎて、下草1本生えていない水を蓄える能力が落ちた森林が崩落するというケースがほとんどだった。ところが、ここ1～2年を見ていると、本来</p>

委員	<p>山腹が強いはずの広葉樹林も崩落している。先日のゲリラ豪雨と同程度の雨が降ったところは必ず崩壊し、従来の森林管理の手法では守れない状況になっている。市の方で災害が起きそうな場所は分かっているはずなので、そういう場所では人の活動をしないということも考えていかないといけない。先日のような大雨に対する防災の方法は今の施策の中にはない。先日の台風で林道も決壊して通れない。雨水と一緒に谷底が流れて土石災害が起きるということになっている。森林災害は、以前は獣害が大きかったが、1時間当たり何10ミリというようなゲリラ豪雨で二重の災害が起きている。相当人力を入れて、草がびっしり生えているような森を作らないといけないが、森林組合で取り組んでいる事業と自伐型林業では、悔しいが焼け石に水である。自家燃料として木をとってくるということもなく、人の手間が無い。そこへ補助金の投下も少ない。米原市は約15,000haの森林面積を抱えているが、ピンポイントのところには山に入っていないというのが山の環境の問題で重要だ。自然災害に対抗するには、人の力をどれだけ投下するかということしかないで、解決策は見えない議論に陥りがちだが、林務課と環境保全課で進めてもらえたらと思う。</p> <p>山を少しでも良くし、防災、獣害抑止、木の活用によって少子高齢化の抑止に少しでもつなげられればという思いから、今年10月から3名に移り住んでもらい、自伐型林業の研修を受けてもらっている。たった3人では小石を投げるだけなので、そこからどれだけ積み上げて、その3人がいるからこそ魅力的で住みたくなるし、住み続けたくなる資源をどれだけ磨けるかというのが今後求められると思うので、うまく計画でも表現していただきたい。</p> <p>SDGsについて、前半の中では、環境・社会・経済の統合の考え方を踏襲するだけになっている。私の認識では、17のアイコン化された目標を世界共通で目指すというところがSDGsのポイントだと思うので、後半の具体的な施策それぞれについて、「この施策の達成によって、これとこれとこれが向上します」というような、アイコン化で市民にできるだけ分かり易く伝えるためのツールとして活用いただけると期待している。</p> <p>SDGsに似た考え方として、前々回の審議会でも少し紹介したスローシティという制度がある。イタリア発祥のスローフード運動をふまえたもので、世界で30カ国、200カ所程度加盟している。人口5万人以下の地方都市で、環境をはじめとする持続可能な地場産業やオーガニックの取組を行政が施策に反映していることを認定するもので、7つのカテゴリーがあり、決められた項目に取り組んでいると認定を受けられる。今、日本では気仙沼市と前橋市の一部の2つしか認定されていない。YUKKURI 米原の協働事業の関係で、</p>
----	--

	<p>スローシティに詳しい龍谷大学の石尚子先生を講師に招いて勉強会をしたが、スローシティに取り組むことで、体系的に環境保全に取り組んでいるということが市民にも分かりやすくなるし、海外的にも提示しやすくなる。SDGs でもいいが、スローシティの認証を目指すまで書けるかどうかは分からないが、基本計画をスローシティの考え方に沿って整理をしていただくというのもありではないかと思う。</p> <p>9ページの表で将来像と書かれているが、将来像というのは「2030年にはこういう状態になっている」という姿を書くものなので、表現的にどうか。また、自然環境の中で「生物多様性」という言葉があったほうがよい。動植物だけでなく微生物や菌も含めてバランスのとれた環境という視点を入れてほしい。また、文化的景観というのは自然と共生する人々の生業や暮らしが作った景観なので、「まいばらの自然が育む」という表現はよくないと思う。</p> <p>重点プロジェクト1が「自然とふれあい推進事業」という表現になっているが、ふれあいというと景観や美しいというイメージをするが、環境の個別的問題や課題も多くあり、生活等も含めた広い意味でのふれあいとして取組ができないか。シカの問題や防災の個別の問題もこの中で議論してもらええる仕組みを検討してみてはどうかと思う。</p>
委員	
委員	<p>5ページの市民意識調査の結果で、不満度は徐々に減少しているが、「新エネルギーの導入」については1割以上の方が不満と思われる。この弱点の克服を重点プロジェクト2につなげていくという意図でよろしいか。</p>
事務局	<p>そのとおり。</p>
委員	<p>それでは、重点プロジェクトでいくつか取組例を挙げられているが、これが市民の満足度を上げる取組になるかどうかの検証はできているか。</p>
事務局	<p>そこまでは分析できていない。</p>
委員	<p>その検証をしていただく必要がある。そうでないと絵に書いた餅になってしまうかねないので、その点は十分押さえていただきたい。</p>
	<p>また、環境基本計画のアクションプランの策定は検討されているのか。というのも、重点プロジェクトで挙げられている取組例が書きすぎに思える。もう少し抑えた表現でもいいのではないか。</p>

事務局	<p>第1次環境基本計画では、当初アクションプランに相当する実施計画を作成していたが、実施計画の策定と評価だけで大変な作業になってしまい、途中で断念したという経過があり、環境基本計画に加え、さらにアクションプランをつくるということは、現時点では考えていない。計画の詳細は、たとえば山のことであれば鳥獣被害防止計画や森林整備計画の中で計画されることであり、また、重点プロジェクトが一部アクションプランを兼ねている。</p> <p>計画の管理体制や市民に計画に関わっていただく推進体制の部分が今後肝要になると思うので、推進体制を検討する際に、本日頂いた意見は十分反映していきたい。重点プロジェクトの実現可能性についても、推進体制のところと関わってくるので、その中で検討をしていきたい。</p>
委員	<p>くれぐれも、不満とされた方への対応としてミスマッチにならないように進めていただきたい。</p>
委員	<p>重点プロジェクトの視点の3つ目に「全国の自治体の中でステキなまちとして評価され、米原市ならではの豊かさをもたらすための環境面からの取組」とあるが、たとえば都市では触れることのできない自然が評価されたとして、イノシシやシカがいていいねといわれるなど、都市部の方から評価される軸と、地元の方が評価する軸がずれていると、何のための目標か分かりづらくなるので、表現に気をつけていただきたい。</p>
委員	<p>都市部から評価されることがそんなに大切かということ強く思う。住んでいる人間がステキなところだから住んでいると思いたい。外部からの評価よりも、住んでいる人間の評価の方が大切だ。エコツーリズムが前提になっているからそういう表現になっているのではないか。観光地というのは消費されるだけになってしまう恐れがあり、そうはなってほしくないと思う。</p>
事務局	<p>重点プロジェクトの視点として、1つ目に「今、米原市に暮らす人々に、未来にわたり住み続けてもらうための環境面からの取組」と挙げているが、2つ目、3つ目の視点と並列にするのではなく、1つ目の視点に重点を置くべきという御意見ということでよいか。</p>
委員	<p>そうではない。住んでもらうとか、選んでもらう、というのが違うと感じる。過疎化した地域で都会からの移住者が増えている場所が幾つかあるが、そういう場所は、来てもらうという発想ではない。来るなら来ていいという感覚である。自分たちが暮らしやすい環境を作っていれば、自然と都会から</p>

	<p>住みたいと来るような状況になる。個人的にはそういう視点を持ちたいと思っている。都会の人にうけるようにという様なまちづくりだと、ブームが去ったときには忘れ去られてしまう。地元の人たちがずっと住みたいという思いを持てるということが大事だと思う。</p>
<p>会長</p>	<p>この3つ目の視点は90年代のマーケティングの考え方で、古い。モノを作れば売れた時代から、美や感性を商品に付加しないと売れないという時代が90年代にあったが、それでも売れなくなり、今は経験や意味を付与しないと売れない。ここに住んでもらおうと思うと、どういう暮らしをしているか、どういう経験ができるかということがないと、人は注目しない。時代遅れだ。</p>
<p>事務局</p>	<p>シティセールスプランの3つの切り口を踏襲しているのだが、視点そのものがどうかという御意見と思う。大事な点なので、3つの視点をどうすべきか、もう少し御議論をいただきたい。「全国の自治体の中でステキなまちとして評価され」という部分と、「米原市ならではの豊かさをもたらす」という部分が必ずしもリンクしていないなど、取扱いが難しい面もある。分かりにくいということであれば、やめてしまうというのもあると考えている。</p>
<p>会長</p>	<p>やめてもいいかと思う。ちょっと古い。</p>
<p>委員</p>	<p>私が住んでいる姉川上流域では、毎日心豊かにここが好きで暮らしておられる。高齢化や清掃活動の人手がなくなっているというのも確かだが、そこに住む値打があるというのを打ち出してもよいと思う。土砂崩れ危険地域の看板が自分の家の前に立っているが、それでも住みたいと思うだけのものがあるというプラス面をとらえられたらいいのかなと思う。</p> <p>スローシティについて、すごく素敵で、SDGs よりよほど分かり易いと思う。SDGs は具体的にどう取り組んでいけばいいのか分かりにくい。スローシティというコンセプトは分かりやすく、かつ、人口5万人足らずの米原にぴったりだと思うが、それに取り組むのは政策課などになるのか。</p>
<p>委員</p>	<p>あちこち巻き込む必要がある。環境基本計画がとっかかりになればと思う。</p>
<p>委員</p>	<p>人口が少ないからこそできるスローシティを打ち出したものができる、それこそステキではないか。</p>
<p>会長</p>	<p>計画の体系に自然との共生を入れたのは、そういう意図ではないか。</p>

事務局	<p>スローシティというと、広い概念ですよ。</p>
藤田委員	<p>元々は食べ物の安全安心から始まり、総合的に考えられていったもので、SDGs に近い位複数の課にまたがる取組をしないといけないが、何らかの取組はしているものばかりなので、その気になればできないことはないと思う。</p>
会長	<p>SDGs が分かりにくいのは、国連の全会一致で作った経緯があって、いわゆる役所の文書であり、すべてを網羅する必要があるので特色をつかみにくくなっている。実はそうではないのだが。スローシティは民間団体がやっているの、その点明確になっているが、どちらも同じことだと思う。計画の中に自然との共生というのを入れたというのは、環境と経済という視点を入れたという取組になっていくのかという気がする。</p>
事務局	<p>将来像としては、「水源の里まいばら」という方が、スローシティというカタカナの言葉より、お年寄りや子どもまで柔らかく伝わるのかなと考えている。計画を推進していくに当たって、SDGs やスローシティの考え方を取り入れていくことは、望ましいと考えている。</p>
委員	<p>人口減社会という現実に対して、人口減少を維持あるいは食い止めるという気持ちで計画を立てようとしているのか。それとも、人口減少を受け入れて、その上でどう適応するか、何ができるのかという計画なのか。</p>
事務局	<p>人口維持のための取組も考えつつ、人口減少も想定した計画としている。</p>
委員	<p>コンパクトになって、そこでどうやって生きていいのかという視点で考えると、また違った方針が出てくると思う。</p>
会長	<p>公共交通の取組は補助金をつぎ込むことになるので、財政的に難しい部分があるが、中国では個人の車に乗合できるシステムが実現されている。また、集落の中で乗合できる仕組など、できる範囲でしていただければと思う。</p> <p>3 閉会</p>